「をちこち散歩」は2人の筆者が6回連載します。

ジープニーの中で

中上　紀（なかがみ　のり）
作家

ラッシュ時の電車に乗っていて、マニラで乗った荷台に屋根のついたトラックをごてごてに飾り立てたジープニーという乗り合い車でおきたことを思い出した。混みあった車内に、隣の人と腕をぴっちりくっつけた状態で私は座っており、片手に握り締めている何ペソだかの乗車賃の払い方がわからず、思案していた。立ってそれを運転手に渡しに行くにはスピードが出ていて危ないし、座ったままだと遠い。何より、人々によって私の身体はぎゅっと座席に固定されてしまっている。

困惑していると、後ろから、小さく折りたたんだペソが回ってきた。どうやら、私と同時に乗った客の乗車賃のようで、皆暗黙の了解でそれを受け取り、前の人に渡している。客らはそのやりとりの際、口々に何か言っていた。たぶんペソ札の持ち主の行き先であろう。ペソはまもなく運転手に届いた。

バケツリレーのような作業に、なるほど、と思いながら私もさっそくペソを隣の人に目的地を告げながら渡した。その途端、なぜか見知らぬ他人であるはずの隣人が、私の内側の部分に入り込んできた。お礼の意味で私が笑うと、その人も笑う。汗をかいた腕を密着させていることに対する照れの分だけ、小さな仲間意識のようなものが発生していた。同じ乗り物で身体をくっつけあってどこかへ向かうことで、不思議な感覚が生まれてくる。私は一人で、周りに居るのは他人だが、ほんのちょっと何かを共有することで、一人でも他人でもなくなる。

フィリピンに限らず、アジアで乗ったさまざまな乗り物で、それと似たような経験をしたような気がする。しかし、日本の都会で乗る満員電車にそれはない。ここでは、何十分と、心臓の音が聞こえるほどの距離に居ても、他人は他人のままである。照れもせず会話もせず、まるで互いの存在など最初からなかったように振舞う日本人は、もしかしたらとても珍しい生き物なのではないだろうか、と思った。